

出題分析			
試験時間	90分	配点	100点
		大問数	3題
分量（昨年比較）	[減少 同程度 増加]	難易度変化（昨年比較）	[易化 同程度 難化]
<p>【概評】</p> <p>大問数は今年も3題であった。昨年と同じく（Ⅲ）が文学部と外国語学部で異なる問題が出題され、（Ⅰ）（Ⅱ）は両学部の共通問題であった。出題形式については、例年通り論述問題が中心であったが、今年も記号選択問題と語句記述問題が出題された。また、資料を用いた出題数は昨年と同程度だったが、統計資料がなくなって図版資料が扱われた。論述問題の総字数は945字程度で、昨年の700字程度から大きく増加し、各論述問題の字数幅は70～200字程度であった。今年には難しい資料読解問題や判断に迷う記号選択問題はなく、比較的書きやすい論述問題が目立ったが、分量が昨年より大きく増加して時間配分が難しかったことを考慮すると、全体的な難易度は昨年並みといえる。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
（Ⅰ）	世界史上の技術変革と自然環境	問1：先史時代からの出題はかなり珍しく盲点だっただろう。「技術変革」として、多くの受験生は磨製石器や土器の使用について言及したと判断して解答では触れなかったが、狩猟・採集・漁撈の技術向上や細石器の使用について述べてもよい。問2：「環境の変化」に鉄器が与えた影響や商工業の発達に関連して、森林伐採にも触れることができたか否かで差がついただろう。また、氏族の解体に伴う変化についての言及は必須。	標準
（Ⅱ）	9～16世紀の人間の移動が世界の文化や社会に与えた影響	問1：問題文や設問文の要求に答えるには、ノルマン人が建国した国家・王朝の名称について字数を割く余裕はほとんどない。特にイギリスとフランスに関する言及はコンパクトに済ませたい。問2：解答では触れなかったがトレドについて詳しく述べてもよい。アリストテレス哲学だけでなくイスラーム科学の影響にまで言及できたか否かで差がつく。問3：ミツレットの説明は容易だが、ユダヤ人の商業活動に言及できなかった受験生がいただろう。	標準

(Ⅲ)	スペインの植民地支配と先住民	<p>問 1・問 2：エンコミエンダ制の内容は基本事項であるため、大阪大学を志望する受験生であれば確実に正答したい。問 3：資料 2 の上段では、服を着た先住民が植民者と育児で助け合い、握手を交わす姿が描かれており、それぞれ選択肢ア・イに該当する。下段では、植民者・先住民の違いを問わず危害を加えた人物が処刑される姿が描かれており、選択肢ウに該当するが、刑の執行者はいずれも植民者であるとわかるため、エは誤り。</p> <p>問 4：ほかの設問内容も踏まえた論述問題は大阪大学入試世界史で頻出であり、本問では資料読解と知識を結びつけて解答する必要がある。問 2 でエンコミエンダ制の「理想」と「実態」について説明できた受験生であれば、資料 2 はあくまで植民者による先住民支配の「理想」を示したものだということに気づいたはずだ。解答ではこの両面に触れながら具体的に述べたいが、受験生にはやや難しい。</p>	標準
-----	----------------	---	----

合格のための学習法

大阪大学入試世界史は、要求される知識の水準は基本的に教科書レベルであるものの、資料読解を通じた高い考察力や表現力が求められる。総記述量や出題形式は年によって大きく変わる場合もあるが、前述の特徴はほぼ一貫している。出題形式の変化に惑わされないよう、教科書の復習を中心に基礎的な知識を固めるのはもちろんだが、学んだ知識を複数の事象に結びつけたり比較したりすることにより、歴史的な思考力を養っておく必要がある。また、過去問演習を通じて、設問文を丁寧に読み込む習慣をつけ、設問の要求に的確に答えられるようにしたい。過去問演習の際は積極的に添削を受け、解答作成力を磨くとよいだろう。